［研究資料］

剣道の試合における防御姿勢の実態に関する研究

笹木春光*1・天野　聡*1・大塚真由美*1・吉村哲夫*1

Research about the actual situation of the defense in the matches of the kendo

by

Harumitsu Sasaki, Satoshi Amano, Mayumi Otsuka and Tetsuo Yoshimura

Abstract

Abstract: The purpose of this research was to clarify how defensive postures in kendo matches effect the result of the tournament based on the specific postures that each player assumes. The research was done by tallying up the number of three types of defensive postures assumed in the matches, which were: A. the posture with the left fist over the head; B. the posture with the left fist lifted up to the chin; and C. Kasumi. The results obtained by the research were: 1. the defensive posture B was used the most in each tournament; 2. defensive postures were rarely assumed at eight dan tournaments; 3. the winning average of player with less defensive postures was higher at the eight dan tournaments and at the tournaments for East-West against.

Ⅰ．緒言

剣道は互いに攻め合う中で，相手の出端・引き端・居尽き・技尽き・崩れなどの隙をとらえて技を決めること，そして互いに相手が仕掛けてくる技に対し応じて打つことが，技術習得上で求めていくべき大切な点であり，この技術習得により理想的な攻防一致の剣道が実践できる。この攻防一致が成された剣道をするために心掛ける点は「攻めて技を出す・応じて技を出す」ことの心掛け，さらには相手の攻めを封じ，直ちに自分の攻めに転じられる姿勢である「剣先を開き過ぎず，手元を挙げ過ぎずに中心を取った形を築く」ことの心掛け，つまり，いかに構えに近い状態を保つかということが重要である。これらの実践こそが剣の理法を全うしつつ，公明正大に稽古・試合することに近づけるものと考える。

高野佐三郎[1)]は剣道教本において「剣道には攻めるということはあるが，受けるも防ぐもないのである。初心の者は，往々敵の撃つ太刀を受止め，

＊1　東海大学体育学部武道学科

受流すを以て能事了れりとなすものがある。之は大なる誤である。（中略）故に受けるということなく，撃つ太刀が取りも直さず受ける太刀となるやう心掛けるのである。故に敵に何の術をも施さしめず，先々の先を以て勝を占めるのが上乗である。我が撃込むと同時に敵も撃ち来れば，躱し，外し，摺上げ，又は應じ返しに先前の先で勝つ。敵が先にて撃ち来れば切落とし，又は太刀を凌いで後の先で勝つ。敵に勝つの法は一つとして攻撃でないのはない」と述べている。つまり，防御することで相手に打たれなかったことを良しとして技のやり取りが完結する事や，防御のみを多用することを戒めており「防ぐは撃つの一手段のみ」の教えを強調しているのである。

しかしながら，近年各種剣道大会において，攻め崩すよりもまず「打たれないように・負けないように」という意識が先行することから，剣先を開いた状態で手元を挙げる防御姿勢を多用する内容の試合が増えたといわれている。さらに選手によっては，面・小手・胴を同時に防ぐ，いわゆる「三所防ぎ（隠し）」の体勢を生じさせ，中には防御一辺倒に終始する状況も見受けられることもある。塩入ら[2]も「攻撃中心から，守り重視の剣道への変化を生じさせた原因の一つが，防御法の巧妙化，特に昭和末期から左拳を上げて面，小手，胴の有効打突部位を同時にカバーする変則的な防御姿勢が見られるようになったことにある」と仮説を立て，試合における防御について研究・報告をしている。

だが，一方では近年，教育現場において剣道試合・審判申し合わせ事項等で「三所防ぎ(隠し)」をしない・させない方向で指導を進め，その効果が現れて試合内容が良くなってきている傾向にあるともいわれているため，現在の剣道における試合内容の実態について調査する必要があると考えた。これまで剣道の防御に関する研究[3)4)5)6)]および試合や昇段審査における防御に関する研究[2)7)8)]は進められているが，一試合における防御姿勢の数とそれが勝敗にどう影響しているのかについて試合別に考察したり，剣道最高段位の八段戦について取り上げた研究は見られなかった。

そこで本研究は，近年実施された剣道試合中の防御姿勢に着目し，それが試合結果にどう影響しているのか・各種大会によって特色がみられるのかを明らかにし，特に八段戦と比較するという視点で検討し，今後の剣道指導の基礎的資料にすることを目的とした。

Ⅱ．方法

デジタルビデオカメラで撮影した剣道試合映像の再生により，短時間・長時間に限らず，試合中に防御姿勢を作った回数をカウントし，データを集計した。対象試合は中段同士の試合とし，上段や二刀流との試合はデータから省いた。また，防御姿勢を作ったまま技を出さなかった状態をカウントしたため，応じて技を出した場合は防御姿勢としてカウントしなかった。防御姿勢の条件は，A. 左拳が頭上まで挙がる　B. 左拳が顎から頭頂にかけて挙がる　C. 霞の防ぎ　の３パターンであり（写真１・２・3），いずれも剣先の延長線上は相手から外れ，竹刀が開いた状態のものである。

またデータにより，パターン毎による防御姿勢の回数，各大会一試合の平均防御姿勢回数（一大会すべての防御姿勢回数を試合数で割った数値），5 分あたりの防御姿勢回数（300 秒×防御姿勢回数/試合時間），防御姿勢回数と試合結果の割合を算出した。

対象の大会は，第 15 回世界剣道選手権大会・100 試合（イタリア・ノバラ市　2013 年 5 月 23 日～28 日），第 59 回全日本東西対抗剣道大会・33 試合（山梨県甲府市小瀬町 2013 年 9 月 1 日），第 61 回全日本選手権大会・55 試合（日本武道館 2013 年 11 月 3 日），第 9・10・11 回全日本選抜剣道八段優勝大会・80 試合（愛知県名古屋市 2011 年・2012 年・2013 年 4 月）の 6 大会（268 試合）とした。

1. 各大会の概要や特徴について

1）世界剣道選手権大会について

国際剣道連盟が主催し，昭和 45 年に第 1 回大会が開催され，以来 3 年に 1 度の周期で開催されている。各国，男子・女子個人戦，男子・女子団体戦の代表選手が出場し，前回の第 15 回大会に参加した国の数は 49ヶ国である。個人戦はトー

ナメント戦，団体戦は予選リーグを勝ち抜き決勝トーナメント戦で剣道世界一を決める大会である。

2）全日本東西対抗剣道大会について

昭和 29 年第 1 回大会が開催され，東日本および西日本からそれぞれ選抜された六段から範士八段までの代表選手 35 名が，先鋒から大将まで対戦方式で 1 試合を行う大会である。1 試合は勝敗が決するまで行ない引き分けが無いため，個人戦と同様の進行になる。

3）全日本選手権大会について

昭和 28 年第 1 回大会が開催され，各都道府県の予選を勝ち抜いた 20 歳以上・64 名の選手がトーナメント戦で剣道日本一を決める大会である。

4）全日本選抜剣道八段優勝大会について

平成 15 年第 1 回大会が開催され，全日本剣道連盟の選手選考委員会により全国より選考された剣道八段受有者 32 名により，トーナメント戦で八段日本一を決める大会である。

2. 防御姿勢のパターンについて

（写真 1・2・3）



写真 1　左拳が頭上まで挙がる（A パターン）



写真 2　左拳が顎から頭頂にかけて挙がる（B パターン）



写真 3　霞の防ぎ（C パターン）

Ⅲ．結果

1. 各防御姿勢パターン毎の回数と平均防御姿勢回数について

各大会における 3 パターンの防御姿勢回数と，1 大会すべての防御姿勢回数を試合数で割った平均防御姿勢回数（図 1・2）において，世界大会は全 100 試合中に防御姿勢が 440 回あり，1 試合の平均としては 4.4 回であった。防御パターンは多い順に B パターン，A パターン，C パターンという結果であった。東西対抗は全 33 試合中に防御姿勢が 211 回あり，1 試合平均 6.39 回であった。防御パターンは世界大会と同様 B パターン，A パターン，C パターンの順に多い結果であった。全日本選手権は全 55 試合で防御姿勢が 531 回あり，1 試合の平均としては 1 番多く 9.65 回となった。これも同様に B パターン，A パターン，C パターンの順に多い結果であった。

また，八段戦は全 80 試合中に防御姿勢が 353 回あり，1 試合の平均は 4.41 回であった。このことから，八段戦は世界大会の平均 4.4 回とほぼ同様の値であったことがわかる。また，東西対抗は八段戦の約 1.45 倍，全日本選手権は八段戦の約 2.19 倍平均防御姿勢回数が多い結果となった。尚，八段戦の防御姿勢パターンにおいても他の 3 大会と同様，多い順に B パターン，A パターン，C パターンという結果であり，すべての大会において同じ結果となった。

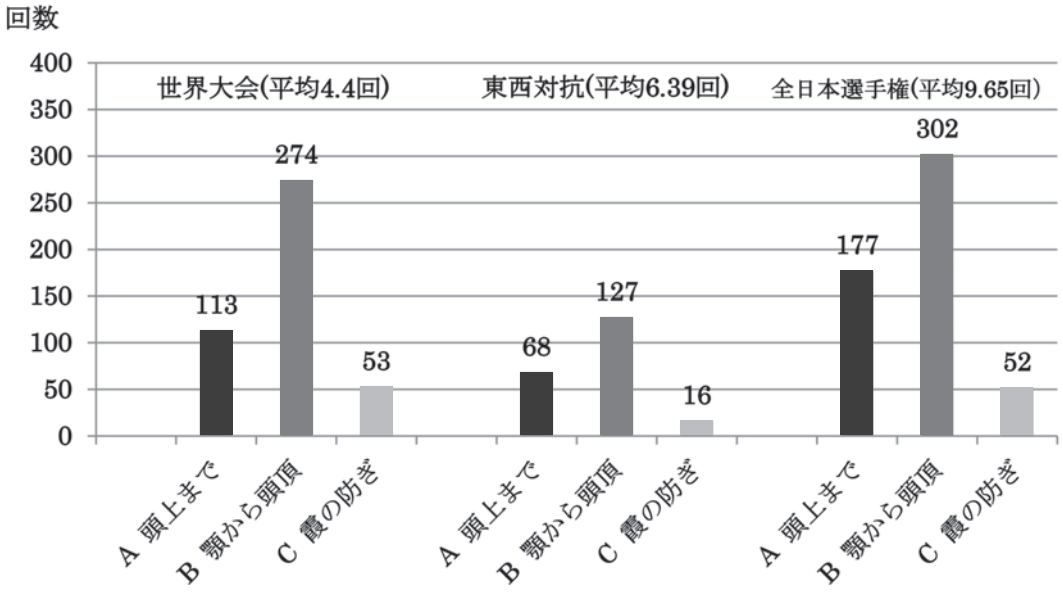

図 1　防御姿勢のパターン毎の回数と平均回数について

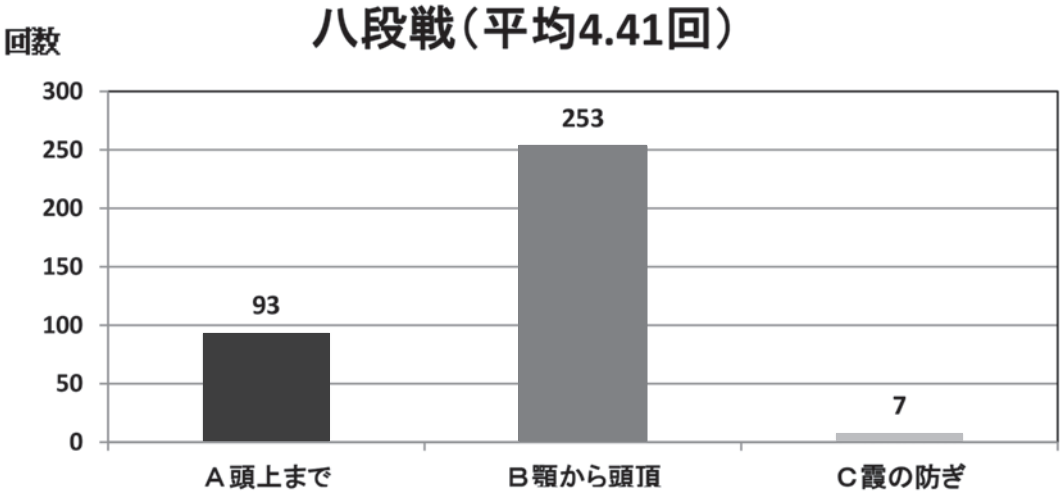

図 2　防御姿勢のパターン毎の回数と平均回数について

2. 5 分あたりでみた防御姿勢回数ついて

5 分あたりの防御姿勢回数（300 秒×防御姿勢回数/試合時間）は，（図 3・図 4・図 5・図 6）世界大会では 0 回から 3 回以内の選手が多く，合計で 153 人，全体の 76.5%が 3 回以内に集中していた。また，7.1 回以上防御姿勢を取った選手は 13 名で，全体の 6.5%であった。全日本選手権においても 0 回から 3 回以内が最も多く合計で 82 名，全体の 74.5%であった。また，7.1 回以上の選手は 6 名で全体の 5.5%であった。東西対抗においても同様に，0 回から 3 回以内に集中しており合計で 45 人，全体の 68.2%であった。また，7.1 回以上防御姿勢をとった選手は合計で 6 名，全体の 9.1%という結果であった。八段戦では，

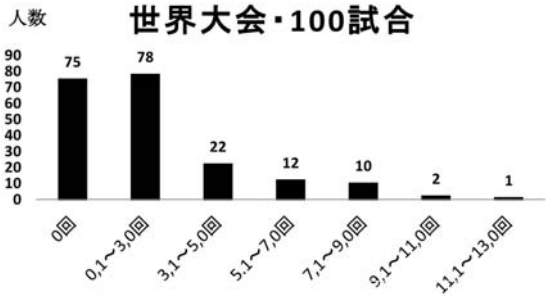

図 3　5 分間あたりでみた防御姿勢回数について

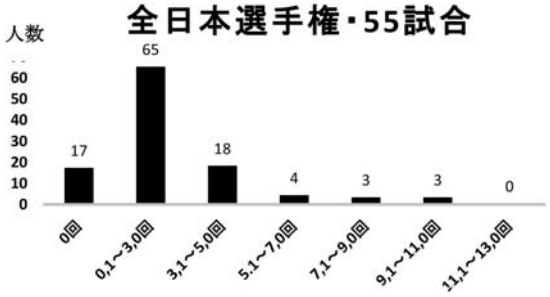

図 4　5 分間あたりでみた防御姿勢回数について

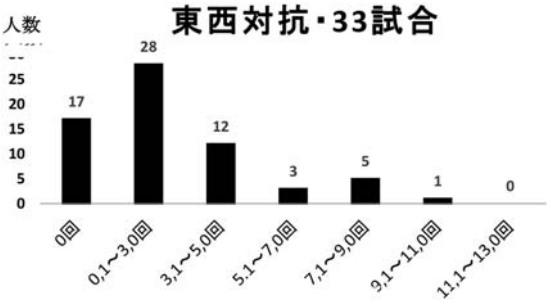

図 5　5 分間あたりでみた防御姿勢回数について

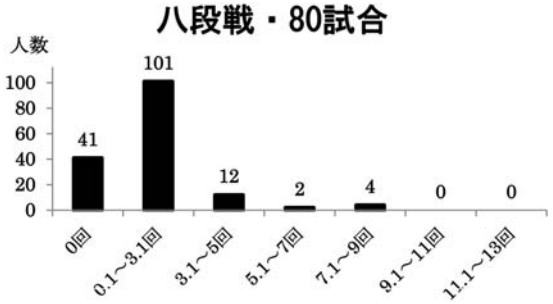

図 6　5 分間あたりでみた防御姿勢回数について

0 回から 3 回までは 142 人おり，全体の 88.8%を占め，他の 3 大会に比べ最も割合が高い結果となった。また，7.1 回以上においても割合は 4 名と最も少なく，全体の 2.5%であった。

3. 防御姿勢回数と勝利数について

世界大会と全日本選手権では，相手より防御姿勢回数が多くて勝った試合の方が，相手より少なくて勝った試合よりもやや上回る結果となった。しかし，東西対抗では，わずかではあるが相手より防御姿勢回数が少なくて勝った試合の方が，多くて勝った試合よりも上回っている結果となった。八段戦においても東西対抗と同様，相手よりも防御姿勢回数が少ない方が，勝利者は多い結果となった。

Ⅳ．考察

全ての大会において，「左拳が顎から頭頂にかけて挙がる」パターンが最も多かったが，この形が多くなった要因として考えられる点は，完全に防御に徹してしまったのではなく相手の技を応じて自分の技に繋げようとしたが，相手との間合いやタイミングが合わずに技を出せなかった状態が，このＢパターンは最も多いのではないかと考える。また，剣先を開かずに打突部位を防ぎ，技に繋げられやすい形として，他のパターンよりもＢパターンが多用されたものと考える。

また，特徴として八段戦においては霞の防ぎが比較的少ない傾向にあった。これは映像を見て判断できる点として，他の 3 大会では小手を打った後に霞の防ぎが多く見られたが，八段戦ではその状況はほとんどなく，小手を打った後でも体勢が崩れずに次の技に繋げたり，相手との間合いを詰めて体勢を整えていることが伺えた。塩入ら[2)]の調査結果である「霞による防御への依存度の高い大学生男女，この防ぎ方を全く又はほとんど行わず，正しい中段の構えを保持しようとする意志が顕著に見られる明治村大会出場者（八段者）と異質の剣道の存在が明らかになった」を裏づける結果となった。また，全日本選手権大会・東西対抗

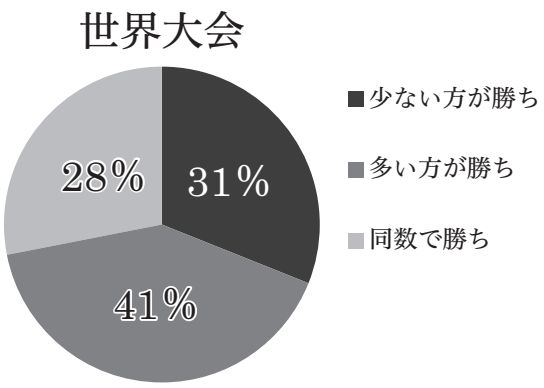

図 7　防御姿勢回数と勝利数について

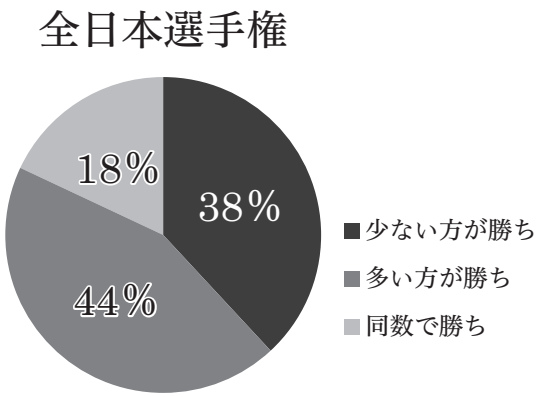

図 8　防御姿勢回数と勝利数について

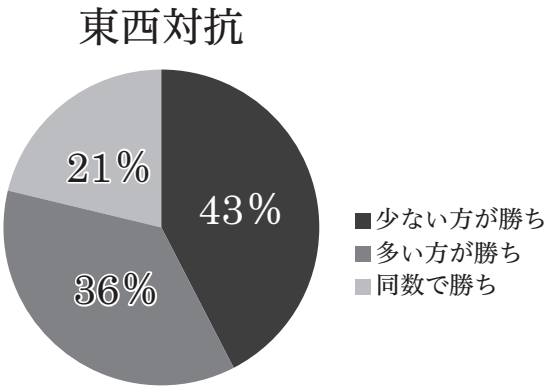

図 9　防御姿勢回数と勝利数について

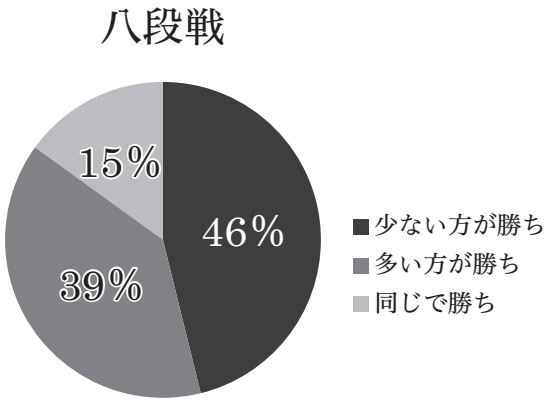

図 10　防御姿勢回数と勝利数について

の防御姿勢回数は，世界選手権大会・八段戦に比べ多い傾向にあり，構えを崩さないように・応じて技に繋げるように試合することの意識よりも，負けないように・打たれないように意識することが先行した内容であることが考えられる。

5 分あたりで見た防御姿勢回数について，世界大会の結果の要因として挙げられることは，勝負がすぐに決まり，他の大会に比べ特に序盤戦では試合時間がとても短い試合が数多くあったため，「勝者と敗者との間に力の差が有る点」「非常に素直な技（単調な技）のやり取りが多い」ことが考えられ，技術レベルの差が生じた試合が多くあったため防御姿勢が少ない傾向に繋がったと考える。しかしながら，4 大会ともに 0 回から 3 回以内に集中していることから，守り主体の状態が少なく，左拳が上がる崩れっぱなしの状態が少ないことが伺えたため，試合内容として良い傾向にあると考える。特に最高段位の八段者においては，多彩な技のやり取りの中でも防御姿勢が少なく，攻防一致が実践された高いレベルの理想的な試合を展開していると感じられる。

防御姿勢回数と勝利数の関係について，「防御姿勢の少ない方が勝利数は多い」八段戦においては，比較的に他の大会よりも「防御姿勢回数が相手と同じで勝った試合」において，互いに少ない回数または互いに 1 度も防御回数が確認されなかった試合が多い傾向にあった。この八段戦や，これと近い傾向に見られた東西対抗の試合結果は，

受けるよりも手元を上げずに攻めて技を出す内容，受けっぱなしで終わらず応じて技を出す内容であり，この剣道を実践する方が勝ちにも繋がるということがいえる。八段戦のように技術が最も習熟したレベルにおいては，崩れたままの姿勢が多い者の方が打たれる可能性は高いといえる。つまり，この内容は攻防一致の剣道が実践された理想的な試合内容と考えられる。それに対し世界大会や全日本選手権は，比較的わずかではあるが，受けっぱなし姿勢のままやり取りを終えることの多い者が，相手から打たれずに技を出して勝ちに繋げ，受けることを先行させた内容の選手が勝ち上がっている傾向にあると考えられる。

今回の調査を通じ，八段戦のように多彩な技を使いながら「受ける・守る」ことへ偏らず，攻めることが防御にも繋がり，防御の後には直ちに次の攻めに転じ技を出せるような攻防一致の剣道を目指して，若年層や学生，世界大会・全日本選手権大会出場レベルの選手は修練していくことが必要であると考える。

Ⅴ．まとめ

1. 各種大会において防御姿勢をパターン別に見た場合，「左拳が顎から頭頂にかけて挙がった」が最も多く，次いで「左拳が頭上まで挙がった」，「霞の防ぎ」の順であった。

2. 1試合における防御姿勢回数の平均を見た場合，東西対抗・全日本選手権は比較的多く，世界大会・八段戦は比較的少なかった。特に八段戦は5分あたりで見た回数において，3回以内の選手が88.8%で特に少ない傾向にあった。

3. 防御姿勢回数と勝敗の関連性を見た場合，世界大会・全日本選手権大会においては相手よりも多い方が勝率は高く，八段戦・東西対抗においては，相手よりも少ない方が勝率は高かった。

今後もさらに各種剣道試合の内容を対象として調査・分析を行い，他の観点からも比較検討を進め，より内容の良い剣道が実践されるような指導法を確立させたいと考える。

引用・参考文献

1）高野佐三郎（1991）剣道教本「上・下」，島津書房，pp 82-83

2）塩入宏行・岩瀬訓子・幸山素子（1999）剣道試合における防御，埼玉大学紀要　教育学部（教育科学Ⅱ），48(1)p 43

3）星川 保（1978）剣道の打突動作，防禦動作の時間的関係からみた剣道技術の特性，武道学研究第11巻2号，pp 114-115

4）恵土孝吉（1981）剣道の防御に関する研究，金沢大学教育学部紀要，pp 123-129

5）竹内虎士（1978）剣道における防禦の不応期，武道学研究第11巻第2号，p 51

6）竹中健太郎（2009）「三所防ぎ」の克服と，その技術効果についての研究，スポーツパフォーマンス研究1，pp 59-64

7）中村 充・菅波盛雄・廣瀬伸良（1999）剣道における試合内容分析―第45回全日本選手権大会を対象として―，武道学研究31-(3)pp 26-34

8）中村 充・岩切公治・菅波盛雄・廣瀬伸良（2001）試合分析から見た剣道技術の推移，武道学研究34-(1)，pp 35-42